

初期症状 経験者が語る

横浜市に住む会社員、川勝弘之さん(64)は脳梗塞を発症してから今年で16年になる。「予防意識を薄れさせてはいけない。そのためには病気の知識の啓発が大切です」。3月、東京都内で開かれた国の施策を検討する「循環器病対策推進協議会」で、委員の一人として力強く訴えた。



循環器病対策推進協議会委員として活動する川勝さん(3月、東京都内で)

自宅で寝ていた川勝さんは2004年9月26日午前

4時頃、のどが濁いて目を覚ました。ベッドの端に座り、両手をついて体を起こそうとしたが、左腕に力が入らない。立ち上がろうとすると、左足を置いた床が「抜けた」ように感じ、そのまま左前方に倒れた。隣に寝ていた妻(61)も家族が抱き起こしてくれなかった。自分で立つことができた。しかも、どこも痛くなく、頭痛もない。本人も家族も「疲れてたのかな。治って良かった。様子をみよう」と思った。

しかし、川勝さんは違和感を覚え始めた。「大丈夫」と言おうとしても、言葉が「かたまり」として

口から出て行かず、消えてしまふように感じた。家族も言葉を理解できていなかった。「やはり、おかしい」。すぐに救急車が呼ばれた。病院に着いた時、倒れてから30分ほどたっていた。

MRI(磁気共鳴画像)検査などの結果、右脳の細胞が直径3・5センチほどの大きさで死んでいた。脳の血管が詰まる脳梗塞だ。倒れる2年前に高血圧を指摘されていた。倒れた日は水分の摂取量が少なく、血液が固まりやすい状態にあったとみられる。

血圧管理などの治療と厳しいリハビリが続いた。2か月後、左の手足が若干不自由だったが退院できた。闘病生活で気づかされたのは、多くの人が脳卒中の正確な知識を持っていない現実だ。「脳卒中は頭痛が付き物」と思いがちだが、脳梗塞や脳出血では頭痛が起

きない人も多い。「様子をみよう」が命取りになる。

そこで勤務する会社内で、そして社外でも、自らの体験を語るようになった。

15年春、鹿児島市での講演会。60歳の女性が突然、「川勝さんの講演を聞くのは4回目。おかげで私は助かった」と語り始めた。職場の机に両手をついた時に左腕の力が入らず、「川勝さんが話していた脳梗塞の症状だ」と思った女性は、すぐに同僚の車で病院に行き、治療を受けた。幸い後遺症もなく、仕事に復帰できたという。

「脳卒中の初期症状を知っていれば、救える命、生活が助かる家族が増えるはず」。日本脳卒中協会副理事長も務める川勝さん。病気の啓発が自分の使命と深く心に刻み込んでいる。

(調査研究本部 坂上博)(次は「意思決定・私と人生会議」)



※過去記事は7/11ドクターで